



燕石相撲傳書

四輯

七

日管
679
39



1.8
679
39

燕石十種第四輯卷七

相撲傳書

江戸書僧

活東子輯



序

夫武備之業，劍、鎗、矢、石、組、打之習練，有繁、多、就、中、離、
至、組、打者，劍、鎗、上、唯、以、四、肢、心、體、之、得、失、方、至、生、死、之、
境、誠、危、戰、之、節、目、武、備、之、指、要、也、于、爰、相、撲、者、戰、術、
組、打、之、一、助、而、用、來、舊、其、例、矣、是、則、平、時、練、武、謂、也、
今、此、書、者、古、今、相、撲、有、功、之、教、形、猶、亦、戰、具、之、組、
合、真、劍、之、中、各、集、相、撲、之、家、傳、故、號、角、力、傳、書、
矣

享保寅曆初夏

木村柳悦

守直撰

本朝相撲之始

日本書紀第五

○ 彥仁天皇己巳朔乙亥左右奏言云當麻の邑小俾士乃當麻の蹶
速といふその人力強し能く角を毀折を申恒々衆中を誇りい
何力を求むるに當り力小あらずものりて何力比はものふ遇
て死生をいふに恒々あらず争べせむ事以得て天皇聞給ひて羣卿
小部て曰ク朕聞當麻の蹶速ハ天下に力士也あまふらざる人あらず
臣進テ言ク臣聞ク出雲國ふる勇士乃り野見宿禰といふ致は人をりて
蹶速ふ當せむと欲す而曰倭直袒長尾市を遣して野見宿禰を喚
らふたれ野見宿禰出雲より至則當麻蹶速と野見宿禰を以て
搦力を而く二人相對して互に互に足を擧て相蹶則當麻蹶速が
脇骨破る折まるとその腰を踏折これを殺す故に當麻蹶速が地を
奪て急ク野見宿禰を賜は是より以てその邑は腰折田と號し乃り野見宿

祢乃留^{ミノシイ}里^シはくふまはふ

○ 孝仁天皇三拾二年秋七月野見宿禰去を政人形を造り殉死^シ代々天皇原野見宿禰が功を賞給ひ土部^{ツチノベ}に職^シ任^ス固^ク奉^ルの姓を改て土部の臣^{ミコト}と^シり是土部の連^{ムラジラ}等^ヲ始^メ祀^ス也

○ 仁皇四拾五代聖武天皇天平元年六月廿五^{ハヒ}部^ヲを改て菅原^{スガハラ}に姓を賜ふ是^レ天德日命拾^ハ世の孫野見宿禰拾^ハ世^ノ古^ノ人也古^ノ人の清^ニ此親也菅原は大和國^ノ名所野見宿禰の菅原氏の大祖也

○ 同代神龜三年七月弦^ツ國^ニ此^レ依^テ御^人を^シて禁^庭ふ^カく始^メて相^撲を^シる^事は御^宇より^己年^代々^々此^レ天子相^撲の節會^ニ名^附ら^レる^例年^々七月^敷覽^有る^事扶桑略記^ハ曰^ク相^撲此^レ事^ハ相^原天皇^レ此^レ御^代より^今代^々の天皇^ハい^ハる^事皆^好之^也貞觀^以後^ノ事^ヲな^り今^聖皇^至あ^んを^とす^亦之^の一^法也^則字^多矣^異云^圖抄^ハ曰^ク相^撲此^レ節^供御^人と^ハ相^撲奉^仕の^人也^則弦^國此^レ御^人之^先二三

月^ノ比^大將^必下^陣の^度ふ^れた^て相^撲使^の事^以定^ム關^白大^將隨^別陣^宿歸^馬

○ 矣數^レ此^レ者^等を^諸國^七道^ニ遣^ハり^て相^撲人^をら^す也^相撲^をを^使を^こし^り法^ハ也^ハ弟^葉集^ふ部^領使^ニ書^圖集^ふい^しり^さが^レ此^レ國^ノ防^人部^領使^駿河^國の^防人^部領^使と^{あり}或^ハ相^撲使^ニ書^侍同^集ふ^大伴^家持^防人^悲別^此心^を痛^クて

○ 麻^順良^男能^由伎^等里^於此^レ天^伊豆^田伊^氣波^女和^可礼^牟牟^之英^奈氣^技家^牟都^麻

○ 源^氏早^六此^レ卷^推が^奉小^相撲^あご^事こ^とま^され^傳る^事寛^平此^レ御^紀曰^ク四年八月九^勝者^拾人^右勝^者二^人

○ 七月^丙色^{にも}張^るを^常にも^敷覽^{あり}き^る事^也兼^和年^中大^臣良^房朝^臣天^氣を^伺得^て勝^負此^レ湯^以定^ムる^事也^勝負^此編^成去^后利^法可^りし^例也

○ 延^喜元^年七月^廿八^日丁^丑童^相撲^を御^覽あり^事延^久三^年此^レ御^紀曰^ク相^撲人^三拾^人次^中に^行列^ス其^將衣^束為^布子^將衣^續

撲人性未此道と凡相撲人の皆東西に分る長橋此内黄端の帖二はを浦
相撲人の座は今より東東相撲を東西に分る事は例ふ扱に家次中
云く早朝大將の宿所ふれりて相撲の番の事を定む右近侍を遣擬
將東司上下此將東を奉仕若相撲の勝負もよく決せられ義明門小
追りス次の番を侍障りを申され相撲こゝせは若乱髪擯鼻禪解
と凡相撲の長櫻橋此中ふ至りて総て勝負分明ありと云く凡上郷
作を奉て左右の次將を召ス次將階下此東西の進んで各見所を申ス或ハ
之郷不同てある瓜作さく拾七番終りて勝のり乱聲ス内取り是ハ
たりたり同士の右同士の尚せあるを地取りと云く百合の左右別と取扱
出ハ能キ相撲を擯と云くさくせん極裏此相撲小家の助と云く事
有り家の最上の相撲ゆて今園相撲といふこと一亦助を想ゆて
胸こり侍り別今此園殿之今園といふ事ハ姓古ハ内裏より相撲人
をて諸國此園納を守りて及ぶ事業にも防人と書是相撲ハ

剛強あるものあり人を防り此望トあり給ふを以て今最とある相撲
を園といふ也その文ハ乱聲と云く今名事といふ事之亦西の方東
の方といふも極裏此扱或之行司相撲此法式古例よりて私の事ハ
わくは并會相撲の古實に家次中八巻其外書くふ出侍と云く事敏也
ゆくふ略を

世継の若れ物語ふいとく宇多天皇在原業平と相撲を取給ひみわど
御負侍りて高欄やぶれきりこや

冷泉院此御宇西の宮殿此御宇少中務通橋敏延と多田満仲相撲
取りありさふ満仲拾子に投りて面をお欠り亦損ぢ事をや
をかきとやおぼりさや腰刀を抜敏延以突ここ給り敏延も橋の根ハ
畏敷一速月バ撲ハ氣色と云く踏遠てまきりた

曾我記云く海老名の源三郎貞平は某が若盛ふ事得漢此は
必相撲をとり或ハ力競べありて其より法れ今も若き方ハ幸を苦補

能登をとり給り給り源三膝揮ヒツとも出で引をせんと言けまば老若無
慮ムと同一ける其侍實平能ヒ殿三盛澤殿相と比よりゆべり出で給給
り一と申するまより相撲取法のり幸問の五郎實俊八ヤキよりゆべりめ九番
おて入ニに候野五郎京久出で幸問をより其名を得る相撲を
續てたま入給投きりけ給于侍河津三郎祐泰直寄以脱捨山袖
まのの上を自徳二筋に重ふまより強く編シて投きり免は候野の東八
國ふ名をよまれ下歳と都ふお力て取けふ彼ふ勝きることありとて相
撲を雙れ名を得きり候野の合もせ給向極より當横さぬわ較
例スなまこと法と号し所を河津候野かと申むと魁カと前々成考を
馬ウマとまより目よりさる差揚まれば候野をさるの河津が股ふ
較カウ系ミる河津とんせ給とわり返マり尚ナりさる搦片ニを教チ
高申の進て横極ふし投きり免

源平盛衰記の云々小評干夏武藏國此怪人綴堂の大将太郎五郎と

兄中より其ふ大カありらるが太郎の東國を雙の相撲の上は十八の園から
まると同ニ和国小次郎義茂と綴ヅキれ太郎推並引の廻り馬よりわら居の綴ヅキの大カか
れは居まればたゆらるとまの山次郎も友の廻りまるとせ附付く持立連と綴
太郎の大カたふととらるる男めて和国小次郎が長チ小わに係ケて押付ておこと
志免和国を細コまよりらるるを潜カで綴を折倒し討ツと思へり長れ大の
ありらるるたゆら何ととおらるる相撲は昔より也綴和国が甲れ上帯引
よせて四較カウ系ミ掛造カて胃カれ綴を傾カて十は又シてまねきり免和国綴の骨
を折せと後勝負とおもひらるる腰コり付てまねきりらる綴の繫ツを
まねきり大波シは後とまねきりた小次郎初ハ大波シは成直と外搦の掛り
骨の折りぬ成直と思ひけまは和国の綴が上帯シりて引寄の繫ツわらと綴
胃カれ綴の地チりて諸チ向チて聲シ出シてともまねきりける綴の骨の折りぬ強
掛りてまねきりぬ若れまねきりぬ掛りまねきりぬ倒ツとまね返シるまね返シ
さるまねきりぬ腕ウデを搦ニ胃カのてんふるをまねきりぬ髪カミ以テ引

人々をよき名聲ふきかす干時相列申されたるは近年武藝廢て自他門者亦
 職方藝の事を好まざる我輩礼を忘る能は比興と謂ふる一徳は弓馬比
 藝の進テ裁會スる一先富庶ありて相撲は勝負瓜分決り我を感スる
 やるや河内佐のしと云々將軍家附し御入真あり干爰或は逐電と或は
 固辞せしむ陸奥掃部助奉行しとて遁避の輩ふたれをいふは仕るるは
 の首再三作合の依テ拾は北軍政ふくひ合ふくし衣袋を撒せは長田吾清
 太郎と出され初候は勝負の是非を判申ス譜代は相撲をふし依テ也

相撲

- 一番 左持 三浦遠江守九郎尉 右 結城上野十郎
- 四番 左勝 橘薩摩守金一 右 服部彌次

- 二番 大須賀九郎四郎 波多野小次郎
- 五番 左勝 廣瀬余三 加藤三郎

- 三番 左持 渋谷太郎九郎尉 右 檢牧中務三郎
- 六番 左持 常陸次郎左衛門 右 七肥四郎

勝持の者御前ふりし御氣御衣以賜る雲客取之ヲ負ルものい堪
 吾を歸せは大器を以各酒を給る事三度御門の法を主等扱ふ候九
 奥あり感ありと時の仕觀也

東鑑四十七卷云々康元二年丁巳十月十五日丙申朝雨降夕甚雷雨鳴ん
 申北朝地震今日雨の隙を以御所の南殿に相撲を覽給ふ相列前の
 武列等賞給ふに候せ座は見物の輩堵のしと時の仕觀也

相撲

- 一番 左 伊豫三郎 右 中次
- 四番 左 平三郎 右 安藤三郎

二番 左 伊豫五郎
右 小野四郎
五番 左 萩園浦太郎
右 四郎太郎

三番 左 荒佐三郎
右 平次郎

○右平記の云々妻鹿孫三郎長宗の薩摩此氏長が末のせちう人よ
とらん器量人の踰きり生年十六の春此以よを好んで相撲をとり
小日本六千余列の中此は力ふ片の掛りとのあり同書に新田義貞此
四天此れも細六郎左衛門時然の氏藏此國の任人也至變此強力以腕の
筋きくして股のむく肉わりのきんは彼薩摩の氏長もわくやと見え
おびきり十六の時より相撲以好んで取けるは坂東八箇國がわりの小更
勝とのあかりを免

○小中鹿之助幸徳は尼子義久之の十勇士此隨一也格三に歳の時より相撲を

好んで取りしは國中よれ力ふ勝者あり其長七尺六寸力の強き事より
かゝり廿六歳までふ入十の歳餘をとりし世きりとい傳

○元亀元年二月廿五日織田信長公近の園常樂寺ふ着給ひ羽音より
國中此相撲を集りしは御賢ある取をらんききものは百佛寺の庵同
小麻宮居服左衛門餘は又市郎青地と右衛門等あり餘は青地と人の出
され御斗附の刀脇差を給りてははる角りしと具せしれよりすべし
信長公御相撲此事委織田軍記ふゆりしと略々本此瀬太郎を主因
春藏居勝負此判法以可

○奥品會津此願主浦生亮彈と氏郷が家人に西村九馬を助して大男此強力
相撲のとりしは免子細あつて勅命せしきりか免^ユされて帰系致り氏郷
自らが力に増りききしを知りかきり彼が不存を極見んや思ひんや
帰系此眼を九馬を助を呼て家と相撲を取り臂力を極見んとて取
らましよふ九馬を助思ひんは勝きしは免らんや北月かん負んにおかて

の物産者も思ふこと心慮猶豫しつゝさふりや。武士のありし見かぎ
らるるにわづらひき事ありとありし定て強を為して細合氏郷の勝り
氏郷を念あり今一番取とそちをわづらひを踏まうり迎習れ軍もいれ
て夜九馬を助負て機嫌ふ意せよう。この山行を極りたる西村まと思ふ
しては夜態と負て細ものと思ひもんより有舟の勝なき事成りと
決定し今夜も西村勝のり氏郷を合合と汝がらう。家より勝をきり
勝負れ情の白波の底を備れ道ありとそ所産ふ加増をし給ひき
時負きうまう。ふ氷見落さるるさふや

中夏角触此事

角触は倭國のさま也

漢武故事の同角触はむろ。六國はこれ造の所也。とりは注のう戦國の
こと増く武を講めて我樂のありて相誘その技力をあらしむ。む
以て相触きううのたとふ云

史記の秦は二世甘泉宮ありて角触をありて樂とあり

事物紀原九卷圓撒活法待字十三卷等にも出漢は武帝も角触
の武備は一 equal 給ふ是則戰場の甲冑堅具は業ありは実切は業
より扱細亦多ものありは細合の眞理を辨強弱虚實は身合武の
ためては細も忘るるを所也

天竺相撲始

本行經に曰く悉多太子諸は釋種と共相撲を並皆地ふ計其體
を傷るべ亦一切は釋種一時の共ふる子を撲を子を以て彼に觸皆
悉く地は例は彼釋及諸者衆皆弄持れ心を生じ

義寂本紀經を引て云く前後後各法苑珠林十卷六少もかを量壽經の抄中一少も也

太子十七悉多太子の白淨王子 日夜憂念していまる曾て歡娛せは常ふ出家を
念ぶ父王僕も同く太子何ぞ日く憂怖をゆや干時一后言う太子をさふ
長く宣ふ當ふ妻要とくもの心を廻るる依ら名女を擇ぶ國の王若覺
女あり名て水衣夫と謂本曾有經法苑珠林の瞿婁とらるる是則耶輸陀羅女也 天下を變也八國は諸ま

此書免ふ未嘗、白澤王聞て則昔覺をたて求衣衣をことむ昔覺言て云け
女母及緒群はあり國の帰り梵志を致して宣路、昔覺國の帰り愁て飲食
せし于時女父同何の由樂はさる又則昔言て云、緒王女をことむ家、これを伴
さん又白澤王今汝を求、我若し樂をん、王則家を罰せ、まゝふ女を去
緒王怨を結、女云く憂、ことあり我却て七日自ら城門、處に緒王を、勝
願せ、世勝強此者、用い、あ、嫁を、于時父白澤王、緒王、王聞更に憂念
曰、太子未練也何、勝事を得ん于時女至門、湖士雲集、悉多太子即憂
陀羅陀調達等、此五百人の礼樂射、應の具をとり、城門の、于時先
調達門、塞る象を投撲、象忽死を難陀、あ、道に側、一、次、
ち子象を擲、城、介、象、獲、王、故、の、亦復調達と、此、力、と相撲
して調達、對、する者、あ、難陀と調達、勝負を決、達、多、地、心、神
同絶、白澤王難陀、あ、女、悉、陀、と、去、も、勝、願、を決、難陀、言、白、
見、須、弥、の、と、自ら、芥、子、の、と、何、を、勝、願、を、せん、と、拜、謝、也、退、

と云五百餘經少は佛を聖に力を説く給ふ

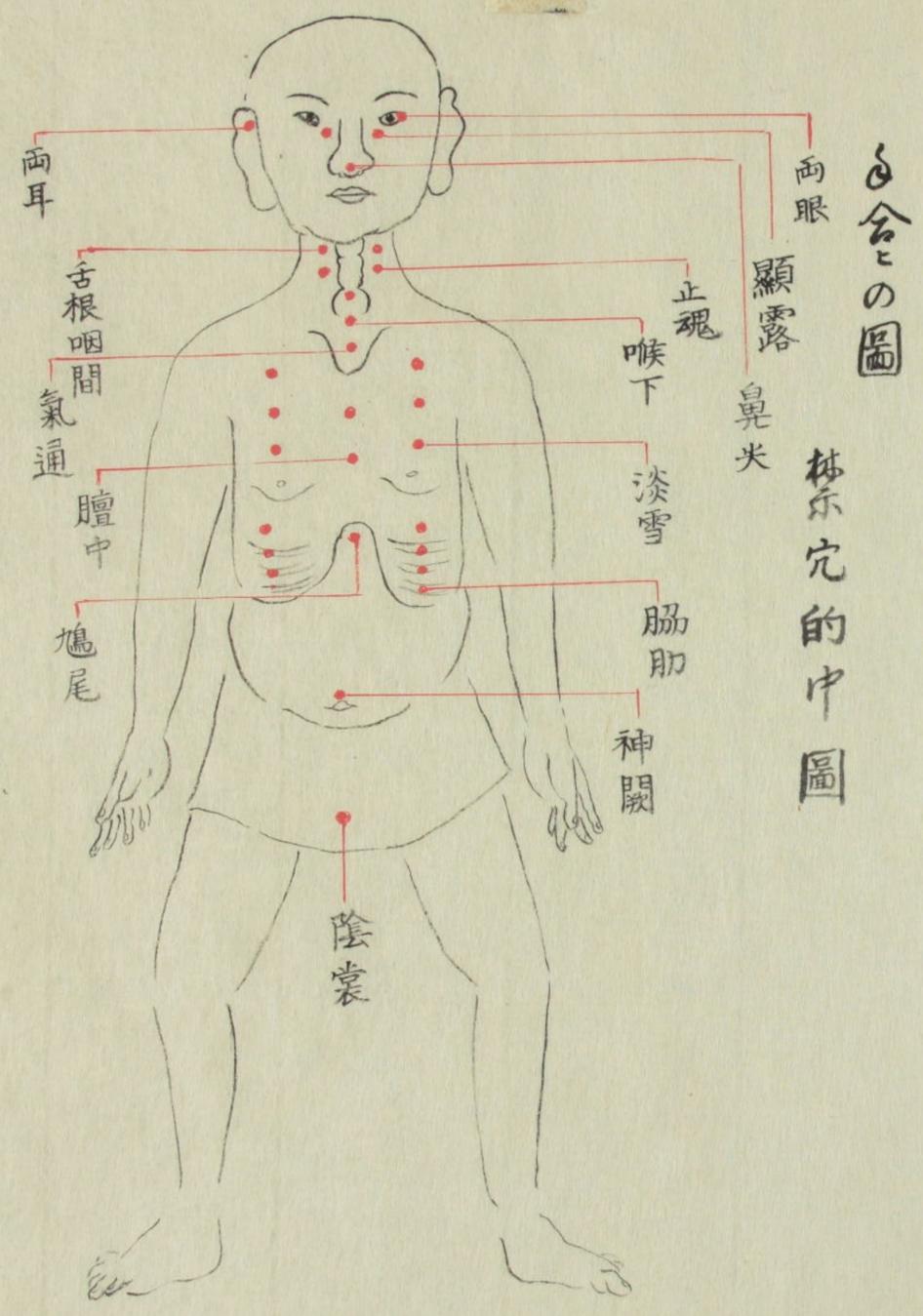
○ 法華經中十四安樂行品、同相扱相撲、及、那羅等、亦、竟、險、相撲、と云、
又、此、八、卷、法、苑、科、注、の、相、扱、は、吳、言、を、以、て、人、不、加、も、の、也、相、撲、は、も、の、
と云、

○ 涅槃經少、又、百、の、力、を、ま、ひ、大、磐、石、を、蹶、て、空、中、を、亦、角、力、相、撲、と、も、
説、給、ふ

○ 日本書紀中、又、意、仁、天皇、此、記、の、相、扱、と、書、く、相、撲、と、同、訓、也、亦、角、力、を、ま、ひ、
と、訓、を、角、力、を、以、て、梵、語、を、考、ふ、は、是、也、是、也、此、梵、あり、九、傳、書、中、夏、天、竺、
た、も、ま、し、の、極、實、多、侍、と、も、文、詞、際、限、あ、き、由、(異、言、) 早

○ 相撲教、方、々、此、事

一 戰場、甲、胃、此、也、具、是、の、穢、を、練、切、実、此、業、自、在、あ、く、以、透、る、ふ、り、と、ん、
切、実、事、容、易、か、く、を、あ、う、は、平、侍、の、徒、膚、の、切、実、事、以、る、穢、甲、胃、
堅、真、の、侍、り、て、中、ぶ、る、事、多、か、ゆ、重、甲、胃、此、理、合、武、備、の、指、要、也、と、ん、バ



心合の圖
林元宛的中圖

朱星の點各真比中

を發する事を辨へば金ヶ角力此勢に何れ唯先入りたる候事
 而も心と心を外を知らば心と心実事此を尋る候體理の
 業候を尋る事あるも此勝ても指す候理を知らば負れ者もまたあり
 此仍始あり古法の格式の如きなり也心合より心合一先
 後此裡の彼家の虚實入り先勝も妙の心あり候後此先と敵の
 未り候ありき前候の先と破れ事多し故上より始終先を返して勝
 下より始終先を返して勝れ候事多し故上より始終先を返して勝
 此を見せざれば敵れ入る事多し呼吸氣を返して心體骨
 氣れ收め候れ古法の教も常任座外心微し己をばおの
 づから業候の勝負己の心ありて他心あり候
 心合と此の技候の類に敵ふ候て空外又作て業候候る
 下と心得をわらば中ある者より上候れもの業候を返して
 是等事候業の自在不自在と謂へり

○ 拳の或は大指を以眼を突事 ○ 舌を以一指子ふと耳を強ううりて此の氣を絶え亡然
 と露○ 顯露舌を以突事 ○ 鼻尖常新よ撲むごとく眼くむの絶え其鼻根
 をりうりと突込ふと此の同絶え亡然と成ル ○ 舌根咽喉の同大指食指を以て突事 ○ 咽喉
 喉下を以て突事 ○ 止魂舌をりて突事 ○ 脇助舌を以て突事 ○ 鳩尾舌を以て突事 ○ 神
 剛舌を以て突事 ○ 喉裏の大指食指をりて突事 ○ 此の中を以て突事 ○ 鳩尾舌を以て突事 ○ 神
 舌を以て突事 ○ 喉の中あり九息身此あり新息を以て突事 ○ 此の氣を以て突事 ○ 此の氣を以て突事
 此あり成ルもの也 ○ 之等新りりをりて此の海裏を以て突事 ○ 胸腹を以て突事 ○ 真氣也
 ○ 指を以て突事 ○ 指を以て突事 ○ 指を以て突事 ○ 指を以て突事 ○ 指を以て突事
 相撲此業の平時の身法といふも中を以て突事 ○ 此の肢體を以て突事 ○ 或は未だどて梵穴
 わり同絶え亡然と事同あり故相撲の理は梵穴梵穴中の圖を以てこれをいふむは圖の
 業師の所ありて平時相撲の理を用ゐるわり平時の理は竹刀木刀を用ゐるわり
 甲田此よは申さるる所ありて表裏さそくしで相撲の理合一ありて一程相撲の
 自身此業ありて真氣の中を以て突事 ○ 此の氣を以て突事 ○ 此の氣を以て突事 ○ 此の氣を以て突事

上段の合 上段の合ある指は上ふありあれを以て眼相と云
 勝負の情を考ふるもの也

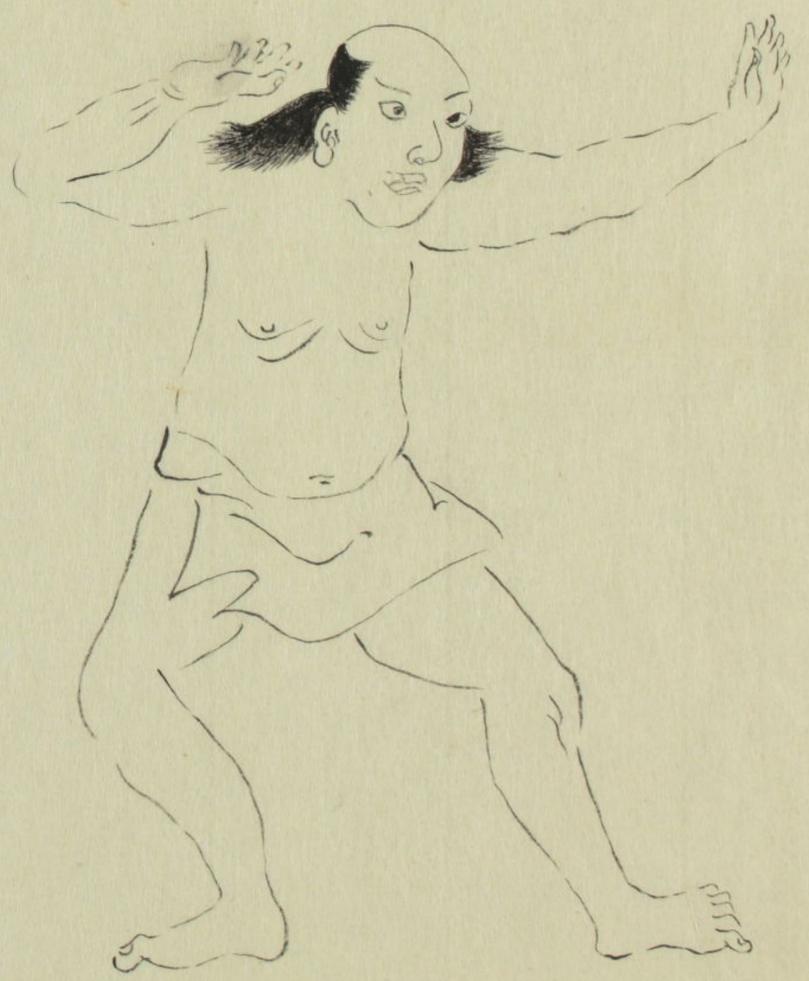
甲田此理合も各
 心體の進退勤靜
 此所ふあさづ相撲
 白身此業甲田を著して
 不自在といふもあつて心
 體業ふ熟と云ふ
 と此の業こんり
 ちさづ



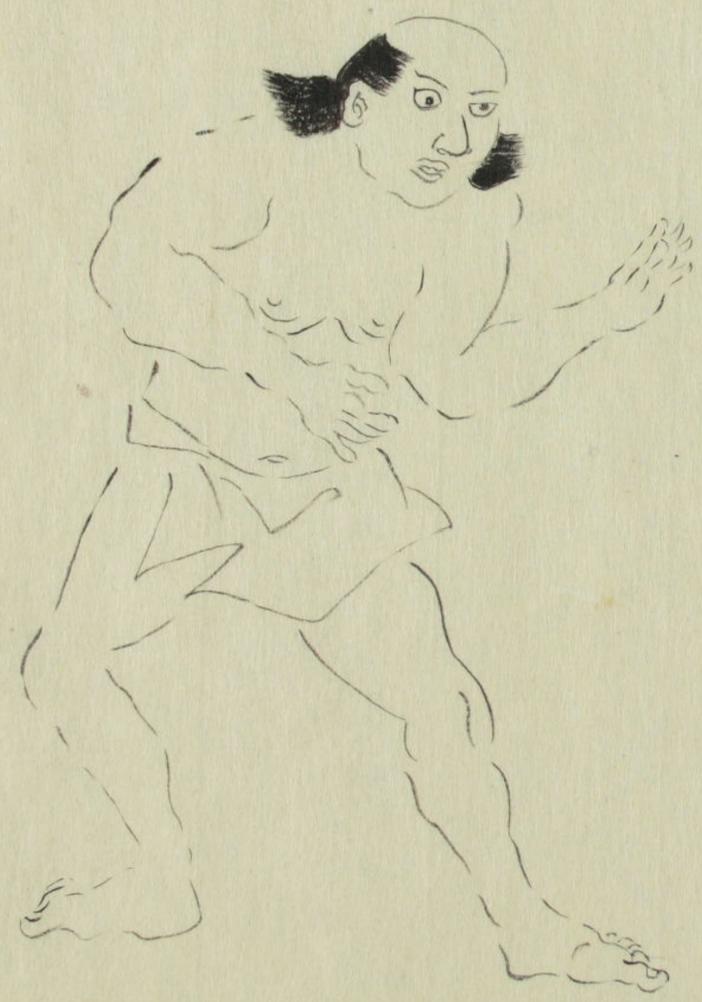
一
 段

二回
一度

中腕の合と
中腕ある指と眼の通り小拂ル



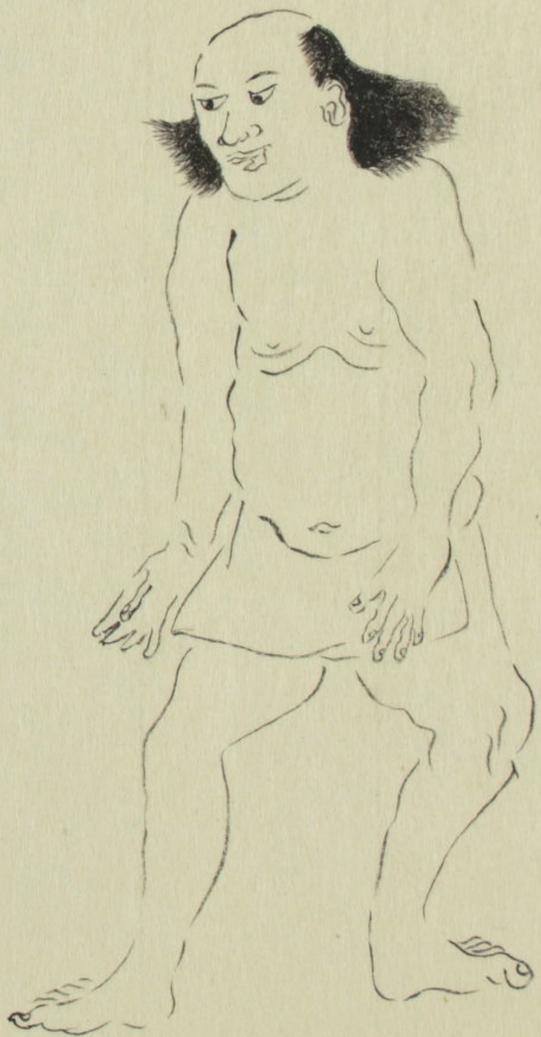
下腕の合
下腕ある肩の小拂り



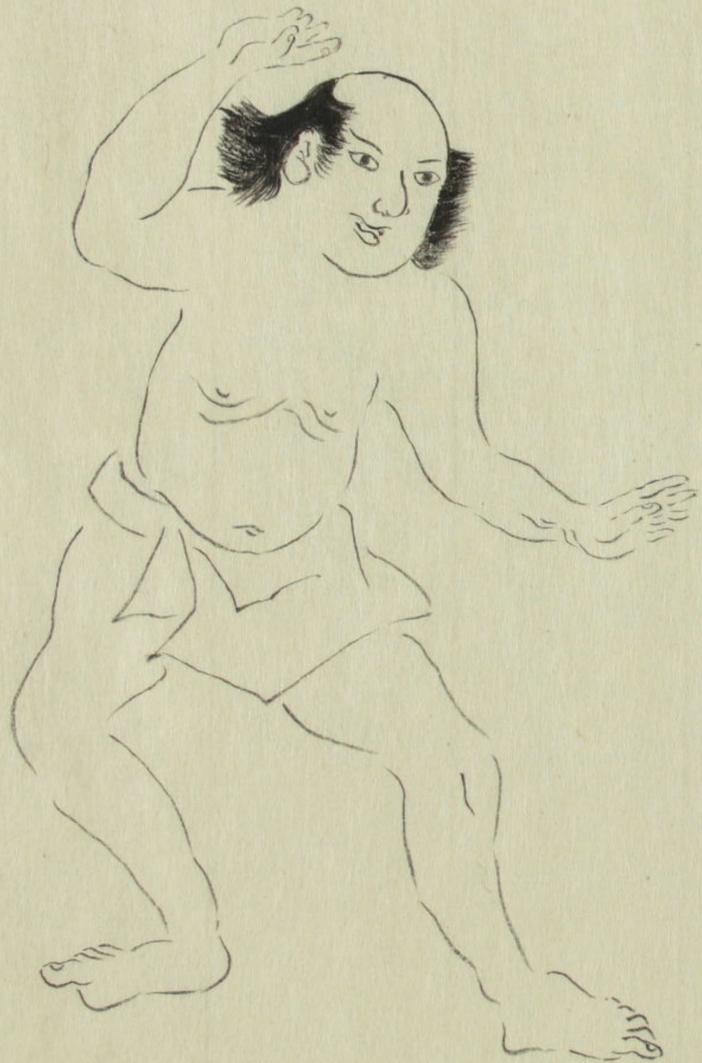
二回
一
破

奇相此の合或の形此の合

奇の變動して常なる敵の強弱虚實ふたつど
轉圓及後撤此象なりを形といふもさうせん是れ別象あり
その破るをうたひといふなり



陰陽此の合或の形此の合



后眼相 立眼相の合也

相撲雙方后合行日固扇を入し聲をかける以扇不意来れを
 防り形也 踏(衝)込へされを
 支脇(さし)へ迫りまはり帯を
 とししを敵の眼相體程を
 らくしその来るべき所を
 察する勝願の情をある
 その也 勝機意憂ゆ
 進退を究むるを勝りかゝる事
 勝を望くおさゆ事 勝りしは是體程
 とも進退動靜出入自在ありは勝り



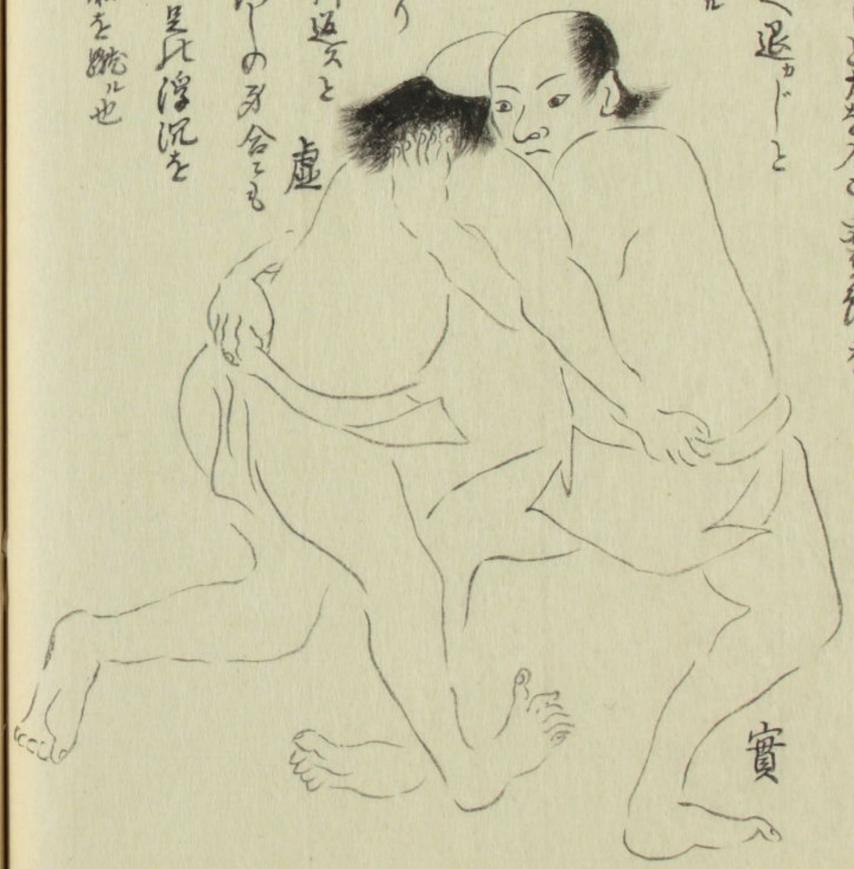
立后腰

雙方立ち方小振り立ち合合と
 つき合虚の方相撲をもち仕をテ
 その心もいなき時実の方不意ふ
 后腰より振り虚の方の右に脇投
 あがり右の足をとり其後立腰ふ
 隙に虚と釣りきり後あがり
 逆がしふある凡相撲の多數無多
 りといふとも合合より發りては版
 身體の業をあらそむる事あり
 右も見ゆせむるも好しといふ事あり
 體程の強弱の礎と名を付する事あり時の表裏
 さきくあれは一番の相撲ふまはり接しといふ
 事あり



踏返し

双方はつゝさし合實の方虚の方を胸して推し起す虚は起されん
 弱しゆ強しゆ押起されん力を入るる所を
 実方以て掛る虚もまじり退くと
 実方以て掛る虚もまじり退くと
 足の落着くを踏返
 踏かざり実の方虚を
 ありて己が右はさへ
 お返しは身を胸に作り
 足を踏ると胸を揺るる折返すと
 三拍子同なり切滞りき居るの身合とも
 後ろを踏返す事ハ敵の足は浮沈を
 考へ歩むに掛る足の落着くを踏返す也



両方の爪捕

雙方実合もさし合虚の方身合
 両方ささるるに實の方不意ありて
 右の身以て虚の足を取ら透る
 たりたりのを泳引揚り倒す
 或ハ実獨りささるる足を引のぞき
 向つき返す事もあり
 或ハ虚の方を引さすこと
 足を引き居るを引つき退
 実倒す事もあり時宜し
 よし



胸投 ナゲ

雙方はるゝに指合し
 手もむねを押し合し
 實の力虚を達させ胸を
 押しあはせ脚の虚の力強
 むととと強りて押し合は
 實を押し合は振拂く重なり
 ろうまうればむねをくうといふ
 ふうもあはれ也



飛遠

二あふとも合虚の力
 一あふよ入こと来ル
 ぬ是治定さく
 脚理上四四の時実の力
 右のふりて虚の力をおく
 とびちがひて己が右のふり
 脚を捨たを押し合し脚を
 ぶちかゆと一和さる虚の力
 ぶらわらたの足れあがを
 見て右のふりては足を蹴る



多怒氣之腹投

味虚實分

相撲をとり損じ横身よへるを後。ふまへられ抱るゝ向々事なり吾師
 前の相撲後これあるを圖の
 如くさう或はあなは是を
 必の通ふふを返り體理を
 とり後の相撲たかむと
 ちをさしたるの是をさたり
 友初らんとせば右の是を
 踏さる後より抱揚る時さう
 なるをさし押さるはははははは
 花あは幸いなり知る後。の相撲さし替り怒まらるるの
 せんをさしひと後をさる。あまうりあう。こがをさ敵の腹さ。は
 幸もあり是は後より抱揚まらる。と此の身合あり



空穂附

勢を強ク揚て投よる投之實の方よるを極る
 或は上より虚のさし後帯をあらそ右の
 方振掛時虚の方より返らんと押さる
 勢をさたうのさうより投多クは
 此の勢の強く振さう強ク
 投と此空穂を附さう振る腹をさる
 上より投の勢とつま
 との或は實の方右
 の腕を虚の方より振さる
 かいき投をさるひあげの勢
 ても勢を強くはははははは



較系一本立チ

較系のふりまひとるやもりり上るのけいほぐ海幸あく後口のま(投)こをれい
 うけられきまるとの光る乙が體下ふ敵ふ前へ投んとをれい(ま)投り敵は前後へ
 投る幸あくとびとま(相)喉をかへま(た)れい(呼)吸もま(か)り(ま)少(か)け(敵)
 玉(ま)れい(ま)も

ま(ま)ら(ま)相撲
 外障の理をらしあひ
 次(ま)ら(ま)りて(ま)ま
 下の勢あり首をま(ま)
 子(ま)ら(ま)ま(ま)ま(ま)
 前(ま)ら(ま)ま(ま)
 倒(ま)ら(ま)り(ま)
 後(ま)ら(ま)ま(ま)
 ありま(ま)ら(ま)け(ま)れ(ま)
 地(ま)ら(ま)ら(ま)ま(ま)
 ら(ま)ら(ま)ら(ま)ま(ま)
 幸(ま)ら(ま)ら(ま)ま(ま)

大尾

虚



